

「技芸科施設・設備の現状と将来展望
その後の経過と今後：音楽科」

筑波大学附属駒場中・高等学校 技芸科

(美術科、音楽科、技術・家庭科、家庭科、工芸科、情報科、書道科)

小宮 一浩・渡邊 隆昌・土井 宏之

植村 徹

「技芸科施設・設備の現状と将来展望 その後の経過と今後：音楽科」

筑波大学附属駒場中・高等学校 技芸科

(美術科、音楽科、技術・家庭科、家庭科、
工芸科、情報科、書道科)

小宮 一浩・渡邊 隆昌・土井 宏之
植村 徹

要約

2004年度より数年次にわたり、技芸科教科プロジェクト研究として「技芸科施設・設備の現状と将来展望」に取り組んできた。実技教科の教育効果は、教科指導に必要な施設・設備の充実度に依存する部分が多く、また他教科に比較してその規模が格段に大きい。本校では基本的に昭和30年代に建築された現校舎の施設・設備を、途中で追加・改善・修繕しながらそのまま使用し続けている。近い将来、校舎を全面新築することを視野に入れた校舎新築プロジェクトも進行する中で、技芸科関連施設・設備の現状を正確に把握し、問題点や新たな課題を見つけ、それらへの対応策を新施設・設備の仕様に組み込むよう準備することが急務であると考え。今回は特に訪問校の教室防音について検証していく。

1 はじめに

まず前回2010年時に視察した都立総合芸術高等学校の音楽科教室等における防音について、その後の訪問における音の体感を通じて考察していく。

その次に今回視察した愛知県立芸術大学音楽学部の訪問報告と教室遮音(防音)性能について述べ、考察していく。

2 都立総合芸術高等学校音楽科教室

2.1 教室の種類について

都内で唯一専門教育を受けることができる芸術関係の学校である(音楽科、美術科、舞台表現科がある)。当然のことながら設備も高水準のものが揃えられている。

総合芸術高等学校音楽科の教室は、主にその用途によって大きく4つに分類される。それらは理論教室、レッスン室、アンサンブル室、合奏室及び合唱室、音楽ホールである。

理論教室は、楽典や和声、音楽史、楽曲分析、ソルフェージュ(視唱や聴音など)を行いピアノは通常1台、レッスン室ではマンツーマンによる個人実技レッスンが行われる教室でピアノは通常2台、アンサンブル室は少人数の器楽アンサンブルを行うための教室でピアノは1台、合奏室はオーケストラを行う教室でピアノは2台、合唱室はコーラスを行う教室でピアノ1台で

ある。音楽ホールは、発表演奏会などの演奏会を行う本格的な音楽ホールである。但し、舞台表現科も使用するホールなので完全なる音楽専用ホールとは違っているのかもしれない。

訪問時に理論教室とアンサンブル室での授業がなかったため、それらの教室の防音性能については判らないが、廊下から見た感じと教室に入ってから印象では、設計図面からの印象よりもかなりきちんと作られている感が強かった。但し、理論教室は演奏が中心ではないためか吸音がしっかりされているように感じられた。

次にレッスン室、合唱室(及び合奏室)、音楽ホールについて述べていく。

2.2 レッスン教室について(写真⑦、⑨右下)

専門専攻及び副科実技のレッスンを行う部屋で、ピアノが2台設置されている。基本的にC5型のピアノを使っている。2台で演奏することもあるので音量的にもかなりのものが出てくる。

設計図を見たときに残念に感じたのは扉である(写真⑦)。圧着密閉ロック式ではない扉で、且つ扉の厚みもそれほどないものが使われていたため音量が廊下や隣室に漏れるのは必至だと思った。また部屋の中が見えるように扉にはかなり大きなガラス部分が配置されていた。これでは音が漏れないはずがない。

壁からの音漏れについては隣室からはあまり音が抜

けてこなかった。設計図を見た限りではもっと音が抜けるかと思ったが、案外聞こえないのには驚いた。やはり、開口部の防音が一番大事なのだということにつきるようだ。

しかし、扉から音が漏れるということは、試験等で新曲視唱などを行う際に廊下で生徒を待たせることができないことになる。隣室でも音が全く聞こえない訳ではないので隣室で待機させることもできない。そうなるともう一つ隣の部屋で待機させなければならない訳だ。且つ、誘導にも人員を配置しなければならない。この点において、扉の防音性能の高いものが必要だったのだと思う。ガラス部分（開口部分）は極力小さくした防音扉を使用すべきだった。

2.3 合唱室(合奏室)について(写真④)

合奏室と合唱室は隣接設置されているため非常に音の気になるところである。残念なことに訪問した日に合唱も合奏も行われていなかったので音の抜けを確認することができなかったのはとても残念である。

オーケストラも合唱もほぼ大体 60 名が演奏することになるので、とても大きな音が出てくることになる(教室も当然広い)。双方ともに音が聞こえると練習の妨げになるのでこれは絶対に避けなければならない点だからである。

事実、入り口部分は 2 重になっており、扉との間に 1.5 メートルほどの空間を空けている。このことにより部屋からの音の漏れを減らしているのである。

是非、次回訪問時に確認してみたいものである。因みに、訪問時に音楽科専任教諭に聞いたところ、音漏れは気にならないとのことだった。

2.4 ホールについて

音楽ホールは別棟になっており、完全に隔離されたホールとなっている。そのため、音は棟外には聞こえない。しかし、ホール棟内に入ってよく見てみると実に色々な箇所が気になってきてしまった。これらのことは主に演奏をしている人にしか解らないことが多いので、設計時に演奏者の声が繁栄されていないことが如実に判明してしまった。

1 階から入ってホール内に入ってみると、なんと客席の一番前部分だった。1 階からはホール中央やホール後方の客席に入れないのである。なんとホール後方の客席に入るためには 2 階から入らなければならないことになっていた。何とも不思議は作りである。通常はホール後方、ホール中央横、ホール客席前の 3 カ所に扉があるのが一般的だからである。

更に、ホールのステージ奥に行くと新たな問題点が

発見された。

まず、ピアノの保管室から舞台への導線が狭いことである。これはピアノを格納したり出したりするときにはピアノ運搬台に乗せて運ぶのだが、ホール脇の通路が極端に狭くなっており通行が非常に厳しいと思われた。

また、控室も 3 つしかなく、部屋も広くはなかった。そのうち一つは倉庫として使われていたのも残念だった。最大の問題点は、音出しができる部屋がなかったこと。演奏者は、演奏直前に音出しや楽器の確認等をするため必ず音出しのための部屋がなければならない。それが設置されていないのは明らかな設計ミスだと思う。通常は地下に音出し室やリハーサル室などがあるものだから。学校という環境に演奏者のための音出し室が用意されていない音楽ホールというのはいかがなものか。非常に残念に感じた。

また、音の管理等についても気になることがあった。昨年末に前身の都立芸術高等学校同窓会による演奏会が同ホールで行われたのだが、私も卒業生として演奏したのである。その時に控え室のモニターから映像も音も出なかったのである。ホール客席後方にある音響調整室にその旨を電話で伝えて、しばらくしてからやっと音が出てきたが通常時には使用していなかったようである。これもおかしな話である。

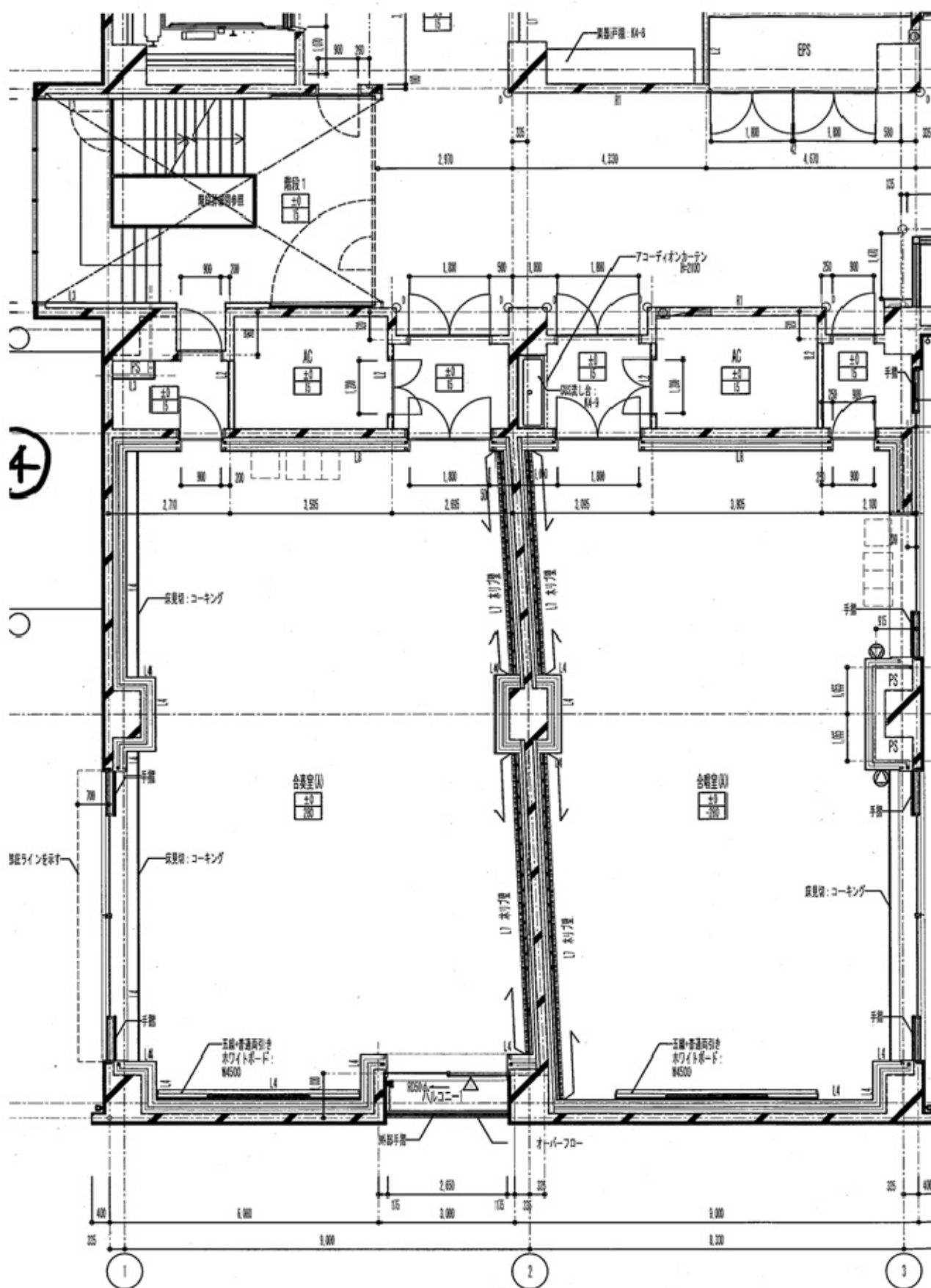
演奏者を育てる学校のホールで演奏者の困ることがいくつもあるのだから、とにかく設計時に教員と演奏者と設計者がよく相談しないといけない。このホールは新築で綺麗ではあるが演奏者のためにはあまり配慮がなされていない箇所が多く見受けられた。

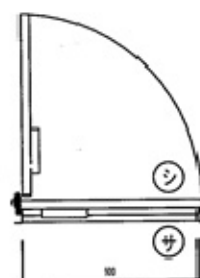
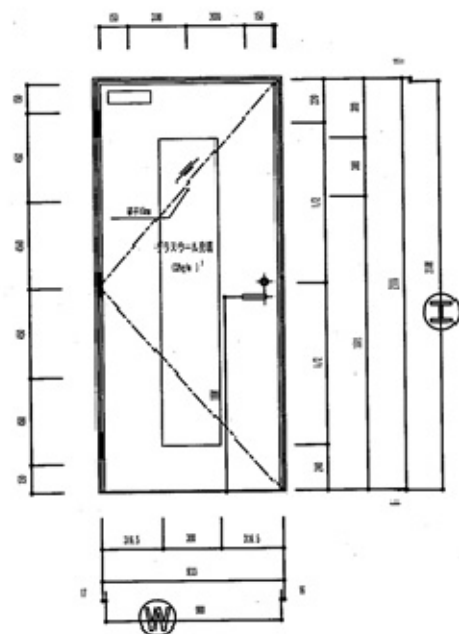
ホール自体の音響に関しては、あまり響きが良い感じはしなかった。空席時にはある程度響いたが、着席時にはかなり音を吸われてしまい響きが良いとは言えなかった。

もう一つ気になる点がある。それは舞台袖の設備が少ないことだ。ステージに緞帳はないので緞帳の開閉などのボタンはないが、もう少ししっかりとした操作盤や放送システムを設置しても良かったと思う。

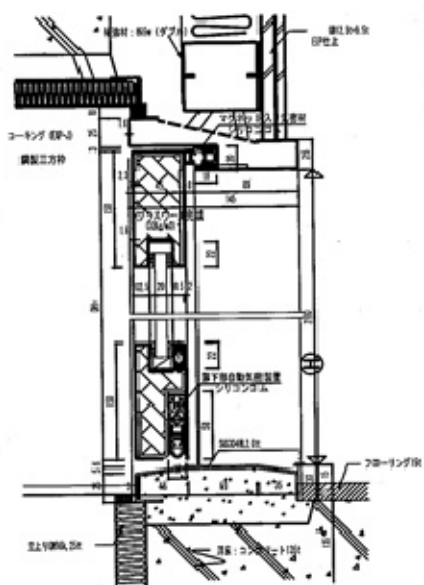
最後に、最近の音楽ホールは残響調整ができるホールが増えている。特に、バロックや古楽器を使用する場合にはあまりヴィブラートをかけないので音の増幅が厳しいのである。そのような視点からも残響調整のできる設備もあると更に良かったと思う。

最初にも書いたのだが、このホールは音楽科だけではなく舞台表現科も使用するので、音楽専用ホールになっていないのかもしれない。しかし、前身の都立芸術高等学校からの流れを考えれば、もう少し一般的な演奏会用ホールに近い設計が行われるべきだったのではないかと私は思った。(次に前回論集より図面 3 枚④⑦⑨を載せておく)

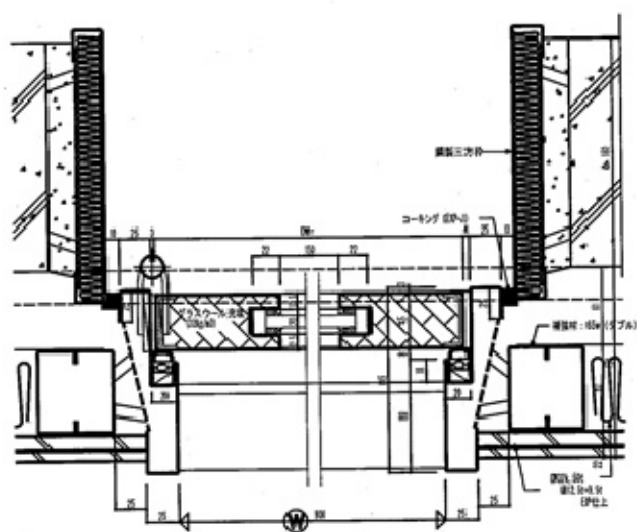




1/16

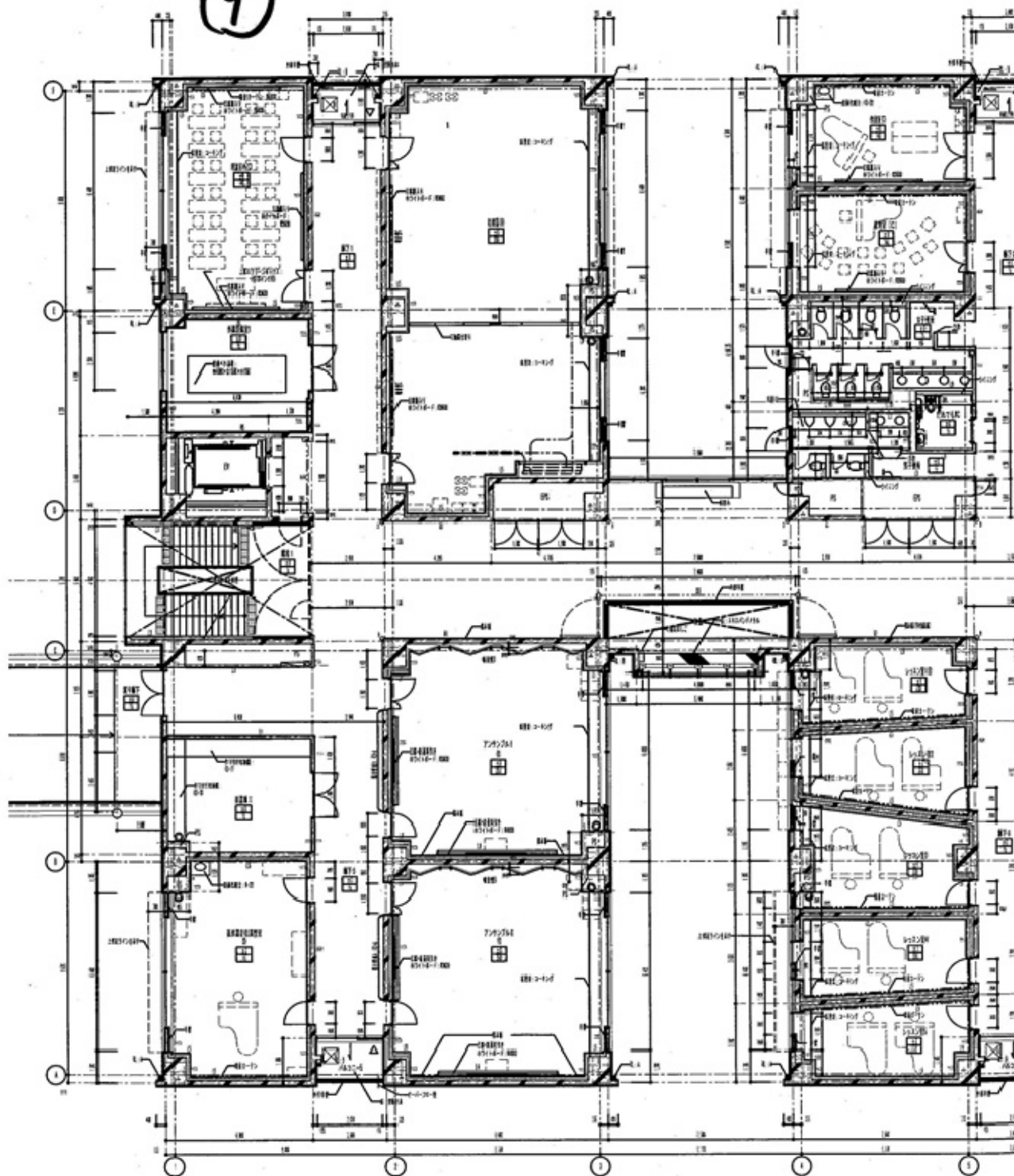


1/4



1/8

9





3 愛知県立芸術大学 音楽学部（新音楽学部棟）

音楽と美術の芸術大学故に専門的な技能を習得するために必要な施設が整っている。

2013年後期に新しく新設された音楽学部棟は2013年度後期の授業から利用されている新しい校舎で、レッスン室と練習室のある「音楽学部棟」、オペラ合唱室と大演奏室からなる「演奏棟」、「室内楽ホール」の3棟で構成されている。「演奏棟」及び「室内楽ホール」は「音楽学部棟」の2階とブリッジでつながっており、この3棟が一塊のような群になっているように感じられた。

音楽教育にふさわしい防音性能や空間量、音響、空調を完備したレッスン室、十分な部屋数を確保した練習室、最新の録音設備を持つ録音スタジオなど、豊かな教育環境を整えながらも、既存のキャンパス全体の建物の景観に合わせた校舎とのこと。

また、オーケストラ等の演奏会を開催する「奏楽堂」（別棟）にはブリッジを渡ってスムーズに移動が可能になっている。

全体の延床面積は 5,898 m²で、構造は鉄筋コンクリート造り3階建てである。教員はカードキーで開錠及び施錠ができるとのこと。この他に管・打楽器棟があるが今回は省略する。つまり、この音楽学部棟は管楽器と打楽器以外の専攻を全てまかなっているということになる訳である。

今回の訪問では新設されたこの3棟をピンポイントで見学させていただいた。更に切にお願いして、大変貴重な設計図面を見せていただいた。ご厚意に大感謝である。

生徒数は音楽学部1年～4年で約400人、大学院（音楽）で約100人が学んでいる（美術学部もほぼ同数）。

3.1 教室の種類について

2013年に出来た3棟は「音楽学部棟」・「演奏棟」・「室内楽ホール」で成り立っているのだが、「音楽学部棟」が3階建てでできており他は別棟のようになっている（但し、ブリッジや通路でつながっている）。

■ 演奏棟

「演奏棟」は、主にオペラ合唱室と大演奏室A・Bである。オペラ合唱室は2重扉と空間を利用して遮音を強めている。部屋の中は全て2階吹き抜けで2階の周囲にはスロープが設置されており、その部分から照明（スポット）などの利用ができる。また天井には照明器具も多数設置されており、照明バーを降ろせば様々な設定も可能になる優れたものである。

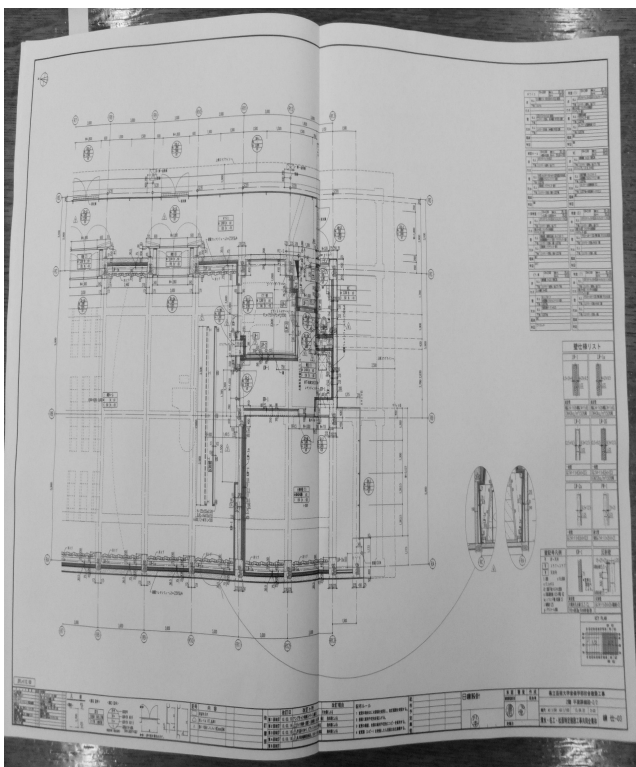
部屋はとても広く、オペラの立ち稽古が完璧に再現出来るのが素晴らしい。

大演奏会室A・Bは2重扉＋空間による遮音がなされていて通路には音は抜けてこない。

■ 室内楽ホール

「室内楽ホール」は完全に遮断された小～中くらいのコンサートホール並みの大きさをもつホールである。天井は3階から4階くらいの高さまで吹き抜けていてとても高く感じる。客席後方は次第に上に上がっており、ステージから音が伸び上がってくるのを感じることができる。

ステージは6m×10mほどの広さがあり、室内オーケストラなら余裕で演奏出来る。ステージ後ろに反響板が設置されている。素晴らしいのはその反響板の後ろに音の出せる部屋があり(下図参照)、そこもある程度広いことだ。これなら演奏前にちょっと練習ということが可能になるのである。勿論、ステージに音は全く聞こえない。演奏者用のトイレ等もきちんと設置されている。また客席上方には録音室も設置されている。音楽学部棟3階の録音室にもここからケーブルでつながっており、録音室でも音の編集作業が可能である。



■ 音楽学部棟

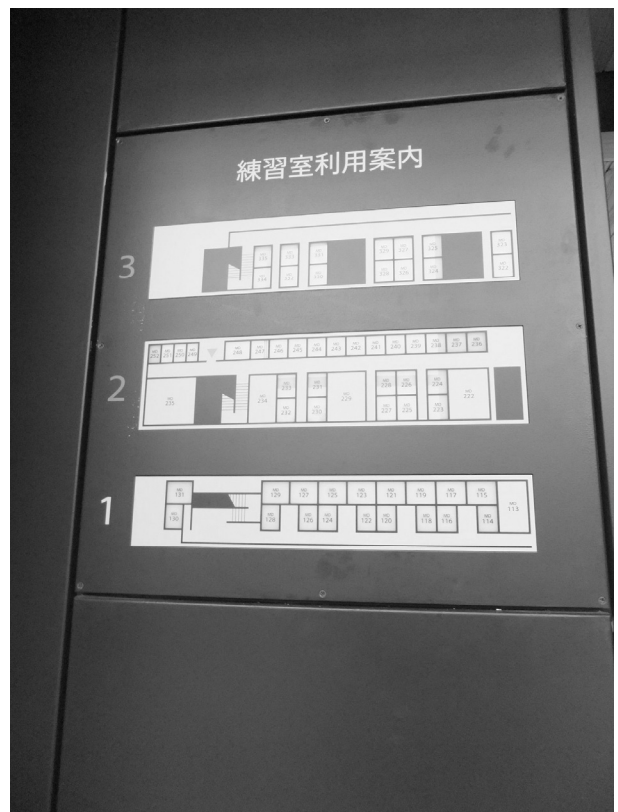
「音楽学部棟」はブーメラン型に造られており、左翼側と右翼側で使用構成の違いがすぐに解る。左翼側は主に教員の研究室(レッスン室)等で、右翼側は主に生徒練習室及び小アンサンブル室である。この左翼と右翼の境目は夕刻時に自動施錠されるため生徒は教員がいないとレッスン室のある研究室側へは行けなくなる(教員はカードキーで開錠及び施錠可能)。

この棟は全室人感センサーが設置されていて、特に右翼側の生徒練習室の利用状況が一目でわかるパネルが1階ロビーに設置されている。人感センサーが設置されているので電気のスイッチがない。電気は人がいなくなると一定時間で自動消灯する。また、ほとんどの部屋にコンセントとLANコネクタが設置されている。

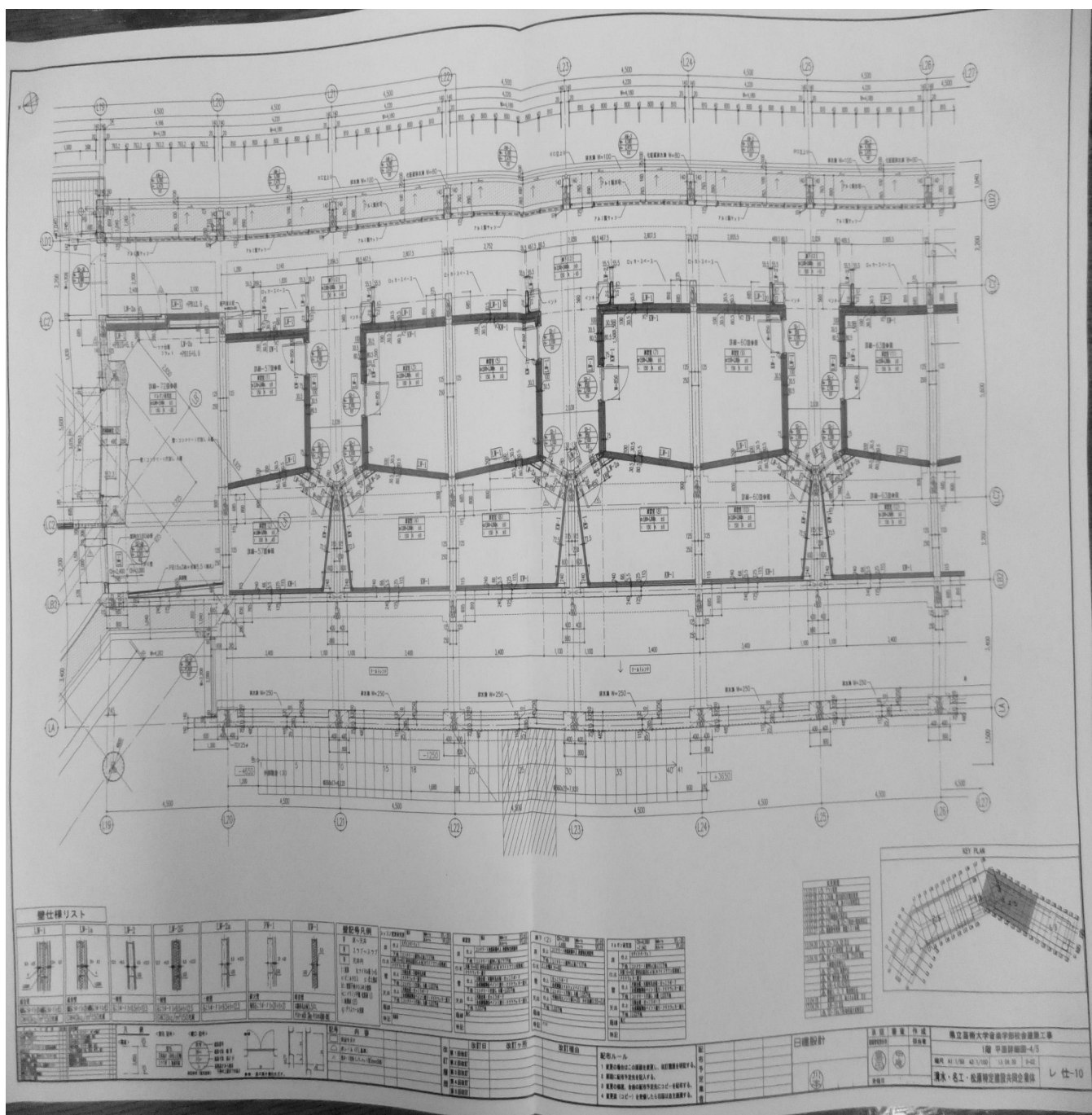
左翼側教員の研究室は、1階が主にピアノ研究室で、2階が学部長室・楽器事務室・演奏事務室・教員センター・音楽学演習室・専攻会議室3つ・ハープ及び弦楽器研究室、3階が電子音楽スタジオ・録音スタジオ・録音室・専攻会議室2つ・作曲及び声楽の研究室である(前頁参照)。

さて、まだ造られて1年ほどの新設校舎なのでとても綺麗である(実にうらやましい限り)。右翼側2階と3階には生徒用ロッカーも設置されている。

右翼側の生徒練習室(小アンサンブル室含む)は64室ほどある。先ほども記したが、全ての部屋に人感センサーが設置されていてロビーに室の利用状況が一目で分かる色分けパネルがある(下図写真)。これにより生徒はすぐに空いている部屋を目指すことができるのである。これはとても便利だと思った。



さて、この後から主に防音という観点で各部屋をみていくことにする。



3.2.1 教室の防音性について「音楽学部棟」

まずは「音楽学部棟」の練習室から防音性についてみていきたい。

右翼側の生徒練習室だが、大変面白い部屋の配置構成になっているのが1階である(上図)。通路からU字に4つの部屋が設置されている。デザイン性と最善の空間利用の形を模索していることがよく見て取れる。通常の教室設定からすれば少なくとももう一つ通路を配置しなくてはならないので部屋数が減ってしまうが、このような形にすれば部屋数はかなり確保されることになる。こういう点はデザインの素晴らしいところだ

と思うので見習いたいものだ。但し、当然のことながら部屋に窓はない。

部屋の中はある程度スペースがある。グランドピアノが入っているが他に2人位も一緒に演奏できそうである。

実際に部屋に入って音を聞いてみたいので、部屋が隣接する奥の部屋に入ってみた。左右でピアノを練習している生徒がいた。部屋に入ると左右からピアノの音が聞こえてくる。それもかなり大きく聞こえた。防音性能は良くない。今回はピアノを弾いている部屋の隣り部屋に入ったが声楽の声もかなり大きいので声も筒抜け状態になるだろうと想像できた。因みに建物の躯体の無い方の壁に耳を付けると更に大きくなった。

この音の抜け方だと各部屋側に石膏ボード+遮音シート+石膏ボードのダブル仕様にはなっていないと思われる(図面を見てもそうになっていないようだ)。これまでの経験上このダブル仕様がなされると遮音性が格段に上がるのだが…。デザイン性重視だということになるのだろうか、かなり残念に感じられた。両側から音が入ってくることになりこの状態はお勧めできない。形や造りが良くないのではなく防音がきちんとなされていないことが残念なのである。是非とも練習室という機能を考えた設計、つまり防音性を高めた設計にしてほしかった。

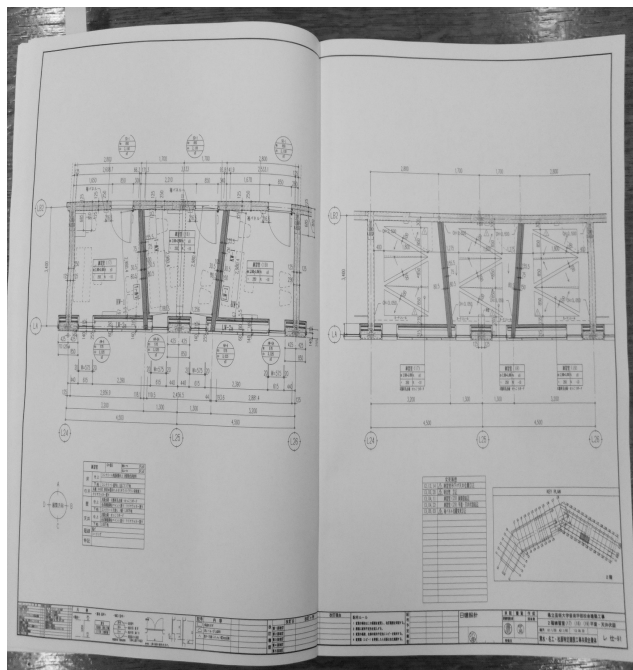


ドアもドアノブ横に縦型にガラスが大きく入っており、更にドアも防音仕様なのか解らないがこれでは音が抜けても仕方ないと思われる。密圧着式でもう少し厚いドアを使用してほしいものだ。

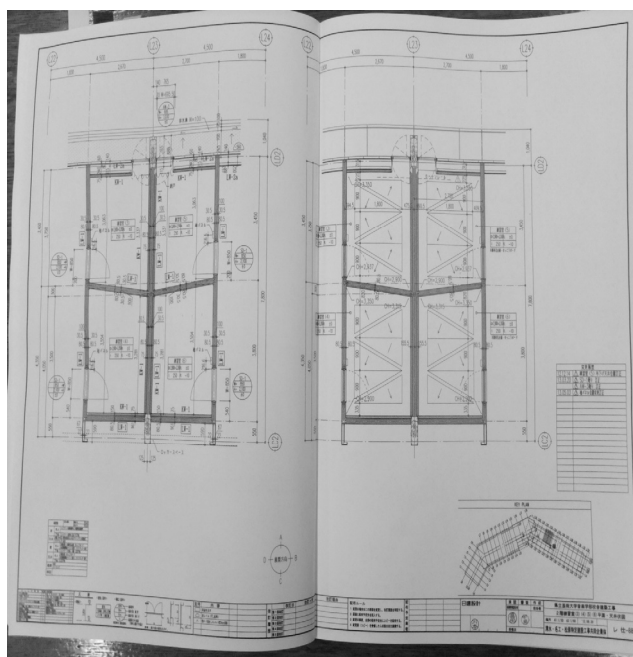
2 階練習室の通路に面している小さい方は全室使われていて中に入ることができなかった(右上図)。この部屋はかなり小さく、アップライトピアノが設置されていた。生徒は2人くらい入ることは可能だが、基本的に一人が個人的に練習するための練習室だと思われる。スペース的に声楽との合わせなら何とかできるだろうが、弦楽器などの楽器との合わせは空間的に狭いと思われる。ボーイングなどを考えるとやはり一人が限界だろう。部屋ののぞき窓から見た限りではかなり圧迫感があるように感じられた。

中に入っていないので隣室との音については全く解らない。廊下を歩きながら聞いた感じでは、中から聞

こえてくる音については勿論音は聞こえてはくるがそれほどやかましくは感じられなかった。



3 階にある練習室の小アンサンブル室では部屋も比較的広く、グランドピアノが設置されていた(下図)。生徒が数名入っても演奏可能かもしれない。但し、弦楽器だと2名ほどが限界かもしれない。隣室で演奏していなかったのでこの部屋の防音についても実感できなかった。

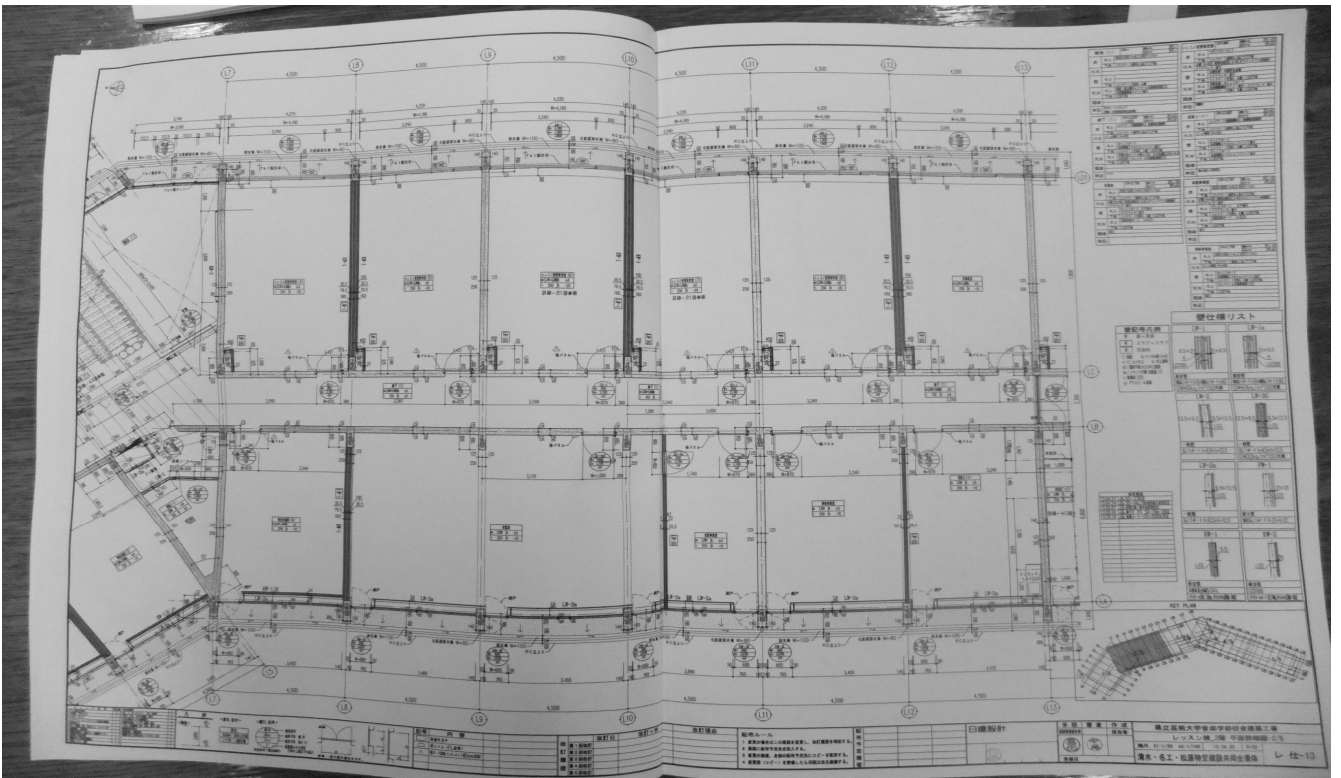


ピアノの足は特別な用具で固定されていた(写真参照)。これは初めて見たものだが、これなら地震がきてもある程度滑り止めにはなるかもしれないと思った。素晴らしい。



また、練習棟の2階にある小練習室や講義室等では練習室と直に接しているため、音漏れが激しく講義やレッスン等の妨げになることもしばしばあるらしい。これはよろしくない。練習室はひっきりなしに生徒が練習するため、その周りへの防音対策はきちんとしないと周りが迷惑することになる。そのことは生徒も教員も困ることにつながるのである。基本的にはデザイン性よりも機能性(防音性)を重視した造りでないと後々困ることになるのである。

さて、今度は左翼側教員の研究室を見ていく。



扉は練習室と変わらない。やはり、部屋の中が見えるガラス部分はもう少し小さくてもいいと思う。部屋の中は4m×7.5mくらいあり、スペース的には十分である。部屋に入ると目の前に待合のための椅子が数脚置いてある。奥にはグランドピアノが設置されている。教室奥の窓も広く大きい。外の景色が一望できて素晴らしい(特に3階)。天井も3mほどあるのでとても広々とした空間を感じることができた。

訪問した教授と隣室のレッスンは無かったので、この部屋の防音についても実感できなかった。教授曰く、隣室の音はそれほど気にはならないとのことだった(但し、部屋によって差があるとも聞いているらしい)。しかし、部屋がこのくらいの大きさになると部屋が広く暖まりにくいそうだ。空調が部屋の天井部分についている点もあり、暖房が効きにくいと嘆いていた。特に女生徒にとっては足が冷えるようで大変そうである。ピアノも手がかじかむと弾きにくいので、空調が上についているのは考えものかもしれないと思った。

話によると、隣室からの音漏れについては部屋によって音の漏れ方が違うようである。

図面を見ると2部屋毎に躯体(コンクリート 25cm)で仕切られているようである。ということは断熱材等で仕切られている研究室もあるわけである。躯体で仕切られている部屋との防音効率と断熱材等で仕切られている部屋との防音効率を聞き比べて見たかった。今回はそこまでお願いしていなかったので次回の訪問時には是非お願いしてみたいと思う。

私が見た感じだとドアから入ってすぐ左奥に小さな水周りがあったが、手を洗う程度のものであまりにみ

すばらしく感じた。ガスも周りに来ていないみたいでコンロも置いてなかった。尋ねてみると、そこまでは設計していなかったそうだ。なんということだろう。レッスン室にはせめてガスコンロくらいは設置してほしいものである。



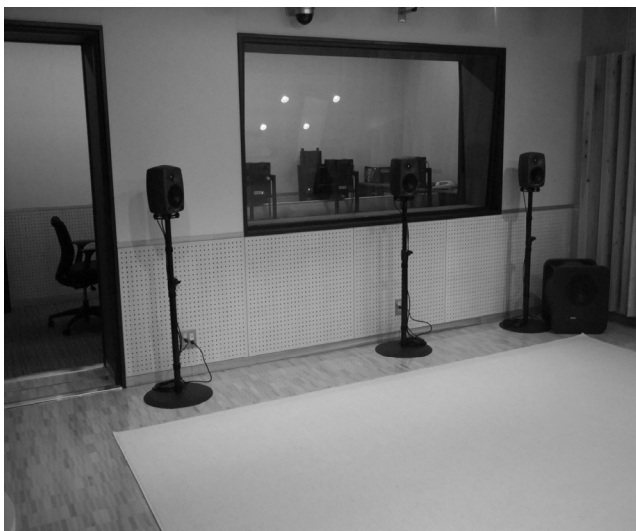
上の写真を見てもらえれば解るが、教室左側はコンクリート打ちっ放しである。防音効率を考えると、これで良いものか甚だ疑問である。演奏する立場で考えるとコンクリート壁は音が反射して響くはずなので嬉しいのだが、音を遮断するという考え方からするとせめて石膏ボード+遮音シート+石膏ボード+壁紙などの施工がほしい。床もフローリング、壁の一方はコンクリート、天井は反響板がついている。これだと逆に響きすぎではないかと考えてしまう。

・録音室について

3階に特別な部屋があると教えていただいた。録音室である。ここは音を完全に遮断するために躯体の中に別の部屋を作る浮遊構造になっていて完全防音とのこと。更に、校内の各演奏ホールともケーブルでつながっていてここで録音及びミキシングなどの加工ができるという。隣には8畳ほどのスタジオも完備している。ちょうどスタジオの責任者(教授)がいらしたのでお願いして特別に中を見せていただいた。巨大なラック型のハードディスクに音を操作する操作盤などがあった。

それらの備品等は今回の新築の中でもかなり高額な設備の一つだと学部長から聞いていた。教授曰く、各演奏ホールからのケーブルが高額なのだと言われていた。なるほど。この録音室へケーブルを各演奏ホールから引くだけでもそれは大変な経費がかかるということは想像するに易しいからだ。(写真3枚)





録音室隣のスタジオ

3.2.2 教室の防音性について「演奏棟」

谷になっている地形の関係からか「音楽学部棟」の2階からブリッジのような橋でつながっている。中に入ると基本的な部屋は次の3つである。オペラ合唱室と大演奏室A・Bである。

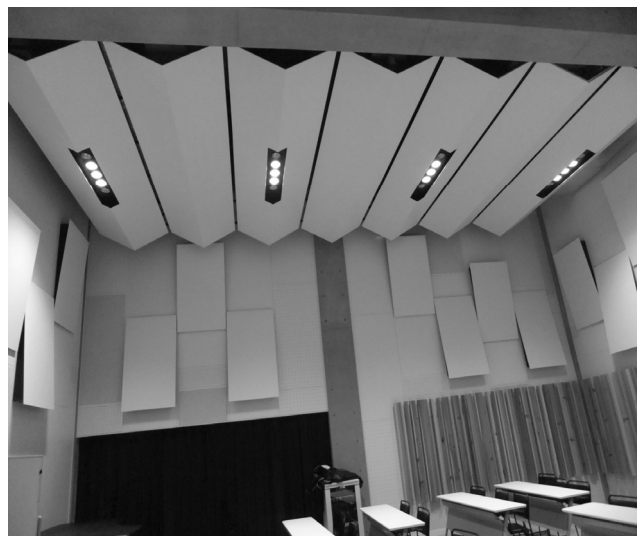
オペラ合唱室は前述したとおり、広く2階まで吹き抜けで、且つ2階周りに通路が巡らされておりスポットライトなどの照明等も設置できるようになっている。広さも抜群で12m×19mほどある。合唱やオペラ実習は勿論のこと、大きなホールの舞台と同じ広さが確保できるのでオペラの通し稽古にも十分使える。縮尺を使わなくて良いということは舞台関係者にとってこの上なく嬉しいことだ。これは素晴らしい施設である。通路からこの部屋に入るには重くて厚いドアを2つ開けなければならない。そのドアの間には1.5mほどの空間が設置されている。このことによって音が教室の外に漏れない造りとなっている。ドア2重と空間利用である。



壁面も鏡張りになっており、演奏している生徒達が歌いながら立ち位置を確認できるようになっている。これもオペラを行う時にはとても大切な点である。何故なら、立ち位置と距離(空間性)が登場人物とその関係性を物語っていると言っても過言ではないからである。その位置関係を知ることがオペラや舞台に携わる全ての者が知らなければならぬものであり、必ず考えなければならないことなのである。

この「演奏棟」に残るのは大演奏室A・Bである。両室ともに講義もできるし、合唱やアンサンブルも可能である。この部屋にも通路から直接は入れない。1度前室に入り、そこからドアを開けて入ることになる。また大演奏室AとBもつながってはならず、扉が別々になっている。これにより防音もきちんとされており隣室からの音は全く入ってこない。

ここも2階まで吹き抜けになっている。天井に反射板、壁に乱反射を催す木材が縦にたくさん並べられている。反響板の上はコンクリート躯体である。デザイン重視なのだろうかなかなか面白い造りになっている。広さも10m×10mほどあり、かなり広く感じる。ここで合唱を歌ったり、大人数の講義を受けたりすることになるのだろう。



3.2.3 教室の防音性について「室内楽ホール」

この建物も通路でつながってはいるが、ほぼ別棟である。ホールというだけあり、とてもしっかりとした造りとなっている。高さは3階ほどありホール内は勿論吹き抜けである。天井に向けて多少すばまっている。

通路側から客席へのドアは3つ。片側から入る形である。客席後ろなどに入出口がもう2つくらいあってもいいかなとは思った。ドアは重く厚いドアが中と外に2重で設置されている。その間には空間が1mほど空いている。ここも2重ドアと空間を利用した防音設計である。これだけしっかりとした状態ならホール内の音は外に聞こえないだろう。



客席も 200 席程度はあるだろう。ちょっとした室内オーケストラと合唱などは演奏可能である。木のぬくもりが感じられてとても落ち着く。更に響きもとても良い。学内演奏会などには最適だと思われる。本当に素晴らしい。

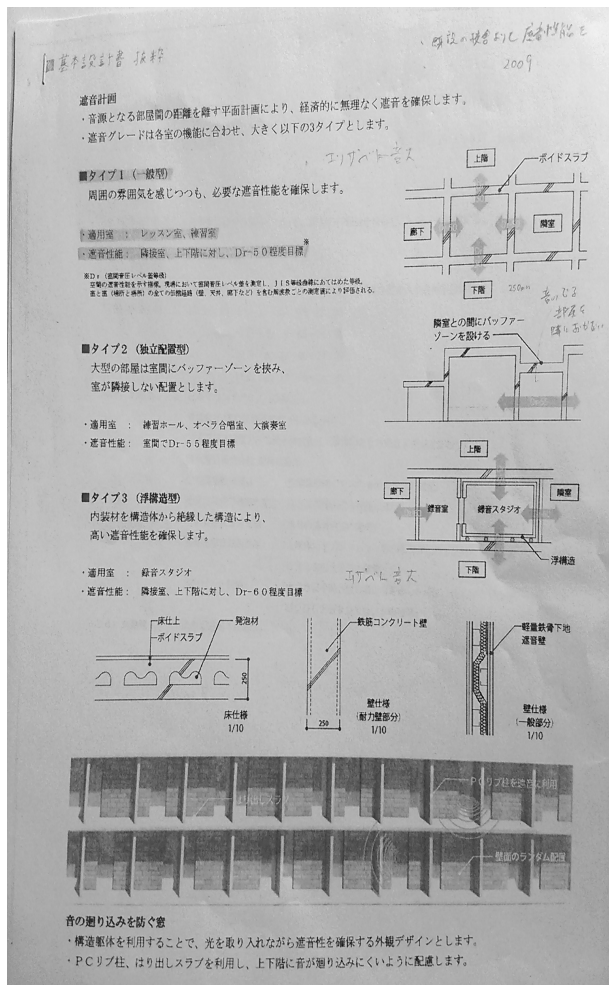
最初に載せた図面を見れば解るのだが、舞台後ろの反響板の後方に控え室などがあり、そこに音の漏れない小練習室があるのが素晴らしい。演奏者というものは本番前に喉のコンディションを整えたり、楽器調整などを行うため少なからず音を出すことになる。そのために音出しのできる部屋が控え室とは別に必須なのである。このようにホールへ音が漏れない練習室があるのは演奏者にとってとても頼もしいことなのである。

但し、ちょっと気になる点もいくつかある。まず、控え室としてのスペースがもう少しあると嬉しいだろう。それと、演奏者が入ってくる楽屋通路や楽屋口が観客通路と一緒にになっている点も気になる。それと、ピアノ保管室がステージに接しているのだが、保管室の扉が少し小さいため出し入れがしにくいのではないかと感じる。反響板が上に移動できるのならいいのだ

が、大きな反響板が上からつてあるようには見えなかった。また椅子や譜面台などの保管室もあった方がいいのかと思うが、図面を見る限りでは見当たらない。客席後方上に録音調整室があるが、そこへの順路も気になった。ホール入り口を入ってすぐ右に螺旋階段があるのだがそれを使用するらしい。省スペースデザインなのかもしれないが、ちょっと違和感を感じた。またホール内にロビーがないので休憩時に談話をするスペースが通路しかないこと。更にトイレも演奏者用しかないので観客(生徒)はホールを一度出ないと用を足せないことになり、それはちょっと問題があるのではないかと思われる。設計上のミスだろうか。更に、演奏時刻に遅れてきた生徒への対応もしずらいのではないかと思った。せめて入り口付近に演奏中のモニターとスピーカーがほしい。それがあれば演奏中無理に入ることもないだろうから。この室内楽ホールでは防音性能は高いが、観客(生徒)への配慮に関しての設計がほとんどなされていないように思えたのが残念な点である。

演奏棟から見た音楽学部棟、音楽学部棟ロビー部分





遮音設計資料、音楽大学の遮音仕様概要

3.3 まとめ

音楽学部棟及び室内楽ホールの通路はほぼ全面ガラス張りになっており採光的にも見た目的にもいいのだが、それは逆に言えば夏季は暑く冬季は寒い状態になるのは必然である。更に、その通路は間接照明になっており夕方からはやや照度不足ではないかと思われる。デザイン性重視な造りは見た目には良いが、機能性ではマイナス面も多いと感じざるをえない。実際にそのようである。

2階の音楽学部棟入り口辺りは1～3階が吹き抜けになっており、見た目としては洒落た造りになっているが、何故か掲示板がない。このあたりの設計も学校としての機能をもう少し考えた造りになっていないと利用者（教員及び生徒）が困るのではないかと思った。

話を聞いていくと、地元の環境に関する反対運動などがあり、短期間での施工となったそう。そのため設計を細かく見直すことができなかったようである。完成後に使い勝手の悪い箇所が相当見つかったとのことだった。事務の方も案内をしてくれた教授も同じ事を言われていたが、校舎(建物)はデザイン性を重視するよりも機能性を重視しないとイケないということだった。また防音に関しては、きちんとした防音をするにはそれなりのコストが伴うということだった。音楽大学という観点からして、資料の昭和音大新校舎における1室おきの浮遮音構造が防音的にも最善の方法だと思われる。次回は昭和音大を訪問したいと思う。

【文責 小宮】

	音楽大学（レッスン室・練習室）の遮音仕様概要		
	←高	遮音性能	低→
構成	<p>浮遮音構造</p>	<p>部分的な浮遮音構造</p>	<p>固定遮音構造</p>
事例	<ul style="list-style-type: none"> 東京音大100年記念館 練習室（2007） 全室で実施 東京藝大4号館 レッスン室（2014予定） 発生音に応じて一部の室で実施 昭和音大新校舎 練習室（2007） 1室おきに実施 	<ul style="list-style-type: none"> 国立音大新1号館 練習室（2010） 浮床+仕上壁と仕上天井の防振支持 エリザベト音大 レッスン室（1996） 浮床+浮天井、または、浮天井 東京藝大ホール館 練習室（→） 浮床 	<ul style="list-style-type: none"> 愛知県芸大新音楽学部棟（2013） 東京藝大3号館 練習室（2002改修） エリザベト音大 練習室（1996） 桐朋音大仙川校舎（→）

※ 上記は遮音構造に応じた分類となっていますが、各部の仕様がそれぞれ異なるため、同じ欄の事例でも最終的な遮音性能は異なります。